
河野裕一の事件簿！ 4殺目

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

河野裕一の事件簿！ 4 殺目

【Nコード】

N 6 2 6 3 A

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

中学生時代の裕一と数葉の二人は北海道へ旅行に行く。そこで起きた事件。そして待望の探偵クエスト。（別に待望じゃない。）

二人の北海道旅行！

P M . 3 : 0 0 .

北海道札幌市某所。

一人の水嶋 ヒロ似の男が「おい、早く来いよ？」と言った。
男の名は河野 裕一、現役の中学生だ。
それに対して「そんな事言われたってえ。」と答えたのは女の子だった。

女の子の名は市ノ瀬 数葉、彼女もまた現役の中学生だ。
彼女は、天才テ ビ君元・レギュラーの飯 里穂にそっくりでかなり可愛い方だ。

以前に美少女コンテストで優勝したんだとか。

彼女は、裕一の事を慕っており、「裕一君」と呼んだり、「裕一様」と呼んだりするのである。

何故こうなっているのかは不明だ。

因みにこの少女、裕一にはかなりの甘えん坊なのである。

そして、今日は二人で北海道に旅行に来ていたのである・・・。

え、何故二人か？

それは、話すと長くなるんですが、裕一の両親は警察の仕事があつて旅行に行けず、姉の美穂も警察官なので休む訳には行かず、裕一は一人で北海道へ来ているのだ・・・。

また、市ノ瀬は母親がおらず、父だけしかいないが、肝心の父が仕事の都合上行けないと言う事なのだ。

二人は旅館を目指していた・・・。

数葉：「あれがそうなんじゃない？」

と、市ノ瀬が横にあるボロイ建物指差して言った。

裕一：「な、何かボロイな・・・。」

数葉：「兎に角入ってみるですう。」

と、裕一の手を引っ張って中へ入っていった。

中に入ったのは良いが、かなりシーンとしていた……。

住所は此处で合ってる筈なのだが……。

数葉：「誰もいないですう。」

そんな事は見れば解る事である。

裕一：「ん、あれで呼び出しをするんじゃないか？」

裕一は、カウンターの上面にベルを見つけた。

裕一がそれを手に取って鳴らすと、「チリンチリン」と言う音が聞こえた。

すると、無駄に若く無駄に可愛一人の釈 由美子似の女性が出て来て「いらつしゃいませ」と二人を出迎えてくれた。

裕一：「あの、予約を入れた河野ですけど……。」

女性：「河野様ですね、少々お待ち下さい。」

裕一：「（か、可愛い……。）」

裕一はそう思った……。

女性は、予約名簿を確認していた……。

女性：「えっと、河野 裕一様とお連れ様一名の計二名様で宜しいでしょうか？」

裕一：「は、はい！」

女性：「はい、それではこちらがお部屋の鍵になります。

扉はオートロックなので部屋を出る際には鍵をお忘れ無く。」

外はボロ屋なのに部屋はオートロックなのな。

裕一は鍵の番号「201」を確認すると市ノ瀬を連れてその番号の部屋「201」に向かった。

部屋は、広くも狭くも無かった。

強いて言えば、四畳半くらいある。

数葉は「不吉な空気が流れてるですう。」と、縁起でも無い事を言った。

だが、裕一は気にしていなかった……。

そりゃあ当然だろう……。

裕一は心霊現象など科学では説明の付かない事は信じていないのだから。

裕一は部屋に入ると早速くつろいだと思いきや本を読み始めた。良く見ると、アガサクリスティーの名探偵ポワロとマープルと言う推理小説だった。

しかも、全てが英語で書かれた原本である・・・。

数葉：「ゆういちさまあ、何読んでるですう？」

裕一：「原本のポワロとマープルだよ。」

数葉も読むか？」

数葉：「あたしい、英語は難しくて嫌いですう・・・。」

そんな市ノ瀬の言葉を聞いているのか聞いていないのか裕一は黙々と読書続ける。

そして、辺りは暗くなり、すっかり日が暮れてしまった。

裕一：「ん、もうこんな時間か。」

そろそろ食事に行こうぜ。」

数葉：「はい、行くですう。」

裕一は鍵を持って市ノ瀬と部屋を出た。

二人は、食堂を目指した。

途中、スラムやバブルスラムなど色々なモンスターが現れたが、二人はめげずにモンスターを倒して食堂まで進んでいった。(ドラ

エっすか?)

そして、とうとう食堂に辿り着いた。

だが、食堂には数人の客しか集まっていなかった・・・。

途中でモンスターに襲われて脱落でもしたのかと小一時間間いつめたいくらいの雰囲気ふんいきだった。

二人は空いている席に座った・・・。

すると、一人の男が声を掛けて来た。

男：「此处、座っても良いかな？」

裕一は「良いですよ」と答えた。

男は腰を掛けると自己紹介をした。

拓海：「俺、緑山みどりやま 拓海たくみって言うんだ。

君たちは？」

裕一：「河野 裕一です。」

数葉：「俺は市ノ瀬 数葉だ。

宜しくなオッサン。」

え、俺？

一人称は「あたしい」じゃなかったのか？

それとも、「あたしい」と言うのは裕一と二人でいる時にしか使つて無い？

拓海：「オッサンとは酷いな・・・。

俺、これでも28なんだけどそんなにオッサンに見えるか？

てか、君は男？」

数葉：「いや、これでも一応は女だ。

因みに、あんたの事はオッサンに見えるぜ。」

拓海：「それはちよつとショックだな・・・。」

そうこうしている内に三人の前に食事が運ばれてきた。

三人は「いただきます」と声を揃え、運ばれてきた食事に手を付けた。

裕一：「おいしいですね。」

拓海：「そうだな。」

そして、三人は食事を終えた。

と、その時だった・・・。

近くの席に座っていた女性が立ち上がって喉を押さえて苦しみ始めた。

その後、女性は血を吐いてその場に倒れた。

二人の北海道旅行！（後書き）

すいません、部屋から食堂までの会話が思いつかなかったのでも「ドクエ」のパロディみたいなのをやってみました。

名付けて探偵クエスト、略して「探クエ」です。

裕一の一番最初の事件！

三人は、女性の様子を伺った……。

ピクリとも動かない所を見ると女性は死んでいると解った。

男：「美和子、どうしたんだ美和子！？」

と、男は女性に声を掛けた。

美和子……これがこの女性の名なのだろうか……。

男：「だ、誰か！

救急車を呼んでくれ！」

だが、緑山は……。

拓海：「いや、呼ぶのは救急車じゃなくて警察だよ。」

男：「あんた、何者？」

拓海：「俺は、私立探偵の緑山だ。

兎に角、警察を呼んでくれ！」

男は、警察を呼びにフロントまで向かった。

自称・私立探偵の緑山は遺体を調べた。

拓海：「うーん、見た感じ、毒殺だな。」

裕一：「どうやら青酸カリ（シアン化カリウム）を飲んで死んだみたいですよ。」

拓海：「え、何で解るんだい？」

裕一：「アーモンド臭（青酸ガスの臭い）ですよ。

人は、青酸カリを服用すると体内の胃酸により青酸カリが科学反応を起こしシアン化水素（青酸ガス）が発生するんだ。

その臭いが、女性の口元から臭うからそう判断したんです。

こんなの、ちよつとした科学の知識があれば誰にでも解りますよ。」

拓海：「成る程、でも何で君がそんな事を？」

裕一：「あ、いや、それは推理小説を読んでるから多分その影響で……。」

裕一はそう言った。

暫くすると、北海道警察が到着した。

そして、刑事は手帳を見せてこう言った。

真理絵警部：「北海道警察の星野^{ほしの} 真理絵^{まりえ}です。」

星野 真理絵・・・。

彼女は、北海道警察捜査一課の星野 真理絵警部だ。

因みに、中山^{なかやま} 忍^{しのぶ}にそっくりで可愛い。（中山さんは作者の大好きな女優でもあります。）

拓海：「あ、星野さんじゃないですか。

お久しぶりです、高校の時以来だったかな？」

真理絵警部：「そう言う貴方は拓海君じゃない。

拓海君って、私立探偵をやってるんですって？

お手並み拝見とさせて貰うわ。

で、被害者の死因は特定出来たの？」

裕一：「警部さん、被害者は青酸カリを飲まされてお亡くなりになりました。」

真理絵警部：「ふうん・・・。

って、君は誰!？」

裕一：「河野 裕一、探偵ですよ。」

真理絵警部：「でもそうは見えないわよ？

どっちかって言うと、中学生かしらね。」

裕一：「そりゃあ、中学生ですからそう見えるでしょうね・・・。」

おいおい、中学生が事件に首を突っ込むなんてどういう神経してるだ？

真理絵警部：「そうなの、じゃああつちで大人しくしててね。

これは警察の仕事なの、中学生が事件に首を突っ込んだじゃないけな
わ。」

断られてしまった。

しかし、これで諦める裕一では無かった。

その後、警察の調べで亡くなった女性は高木^{たかぎ} 美和子^{みわこ}だと言う事が
解った。

死因は勿論、青酸カリである・・・。

死亡推定時刻はPM・7：30頃。

検死の結果、食べた食事に毒が入っていたとの事だった。

そして、それを確認する為、テーブルに残った食事の方も調査した。すると、案の定青酸カリが検出された。

拓海：「成る程、このコップの中の水に毒が盛られていた訳だな。」

真理絵警部：「その通りよ。」

流石、物解りが良いわね。

そんな事よりその貴方？」

警部は、電話で警察を呼んだ男に指差しながら言った。

男：「お、俺？」

真理絵警部：「貴方の名前聞いて無かったわ。教えてちょうだい。」

男は「深山 耕太^{みやま こうた}」と、名乗った。

真理絵警部：「深山さん、亡くなった高木 美和子さんとはどういう関係ですか？」

耕太：「美和子とはただの友達です。」

それ以上の関係はありません。」

真理絵警部：「そうですか。」

では、此処に來た理由を教えてください。」

耕太：「そ、それは・・・。」

け、警察は人のプライベートな事情まで詮索する気ですか!？」

プライベートねえ・・・。

成る程、そう言う事ですか。

裕一は一人で納得していた。

しかし、星野は納得していなかった。

真理絵警部：「兎に角答えなさい!」

耕太：「解りましたよ、答えれば良いんですよ。」

俺は・・・俺が來たのは・・・美和子に告白する為ですよ!」
と、赤くなりながら言った。

真理絵警部：「でも、貴方の思いは受け入れてくれなかった。

それで貴方は彼女の食事に毒を盛って殺害した。

そう言う訳ですか？」

何でそう取れる？」

と、そこへ裕一が突っ込む。

裕一：「それは違うんじゃない？」

考えてもみてよ。

普通、毒を持ち歩くと思う？」

もしフラれて殺すんなら自分も毒を飲んで後追い自殺をすると思うよ？」

真理絵警部：「それもそうね・・・って、子供はあつちで大人しくしてなさい！」

と、怒る星野であつた。

裕一は、料理人がいる調理室に入つて行つた。

入つたのは良いが、調理場にいた料理人に突然声を掛けられた。

料理人：「君、此処は関係者以外立ち入り禁止だよ？」

裕一：「いや、僕は表にいる刑事さんに調理場を調べて来てつて頼まれたから来たんだけど・・・。」

料理人：「刑事？」

食堂で何かあつたのかい？」

この人、今がどういう状況か知らないのか？」

裕一：「知らないんなら教えてあげるけど、食堂で人が倒れたんです。」

どうやら、青酸カリを服用して亡くなった様ですね。

それで、殺人の可能性もあるから調べに来たんだけど駄目？」

料理人：「そう言う事なら全然構わないよ。」

あ、そうだ！」

裕一：「はい？」

料理人：「食堂で誰が亡くなったんだい？」

裕一は、食堂で亡くなった高木 美和子の事を話した。

すると、料理人は顔色を変えて「美和子〜！」と叫びながら慌てて食堂へ飛び出した。

真理絵警部：「ん、貴方は？」

と、聞く星野だが、料理人には聞こえていなかったのか、料理人は「美和子っ、美和子っ！」と、呼び続けていた。

真理絵警部：「あの、遺体には触らないで貰えます？」

と言うと、漸くぜいじゆ気が付いたのか、料理人は我に返り「すみません」と謝った。

料理人：「それより、君は確か・・・真理絵ちゃんじゃない？」

真理絵警部：「貴方、私の事知ってるの？」

料理人：「知ってるも何も、中学卒業以来じゃないか！」

真理警部：「も、もしかして、拓也君！？」

拓也：「俺の事覚えててくれたんだな。」

耕太：「え、拓也？」

もしかして、谷山たにやま 拓也たくやか？

俺だよ俺。

覚えてるだろ、大学で同じクラスだった。」

拓也：「深山 耕太か？」

耕太：「そうだ、俺だ。」

拓也：「久しぶりだな耕太。」

今日はどういう用で？」

耕太：「ちよつと訳ありでね。」

拓也：「それって、この亡くなった美和子の事かい？」

耕太：「拓也、美和子の事知ってるのか？」

拓也：「ああ、高校の時に二年程付き合ってた。だけど、大学に上がるときに別れたんだ。」

と、思い出話を語った。

真理絵警部：「ふうん、此処にいる私と深山さんと拓海君と拓也君って意外なつながりがあったのね。」

拓也：「で、美和子は青酸カリで亡くなったんだってな。」

真理絵警部：「何で拓也がその事を？」

それは裕一が話したからである。

真理絵警部：「え、あの子が！？」

君、河野君って言ったわよね。

でかしたわ、こんなにも早く交友関係を洗うなんて。

凄い才能の持ち主ね。

貴方、捜査に協力しなさい。

良いわね？」

裕一：「ぼ、ぼ、僕が？」

な、なんかとんでも無い事になったぞ？

中学生が捜査に協力なんて聞いた事も無い。

アリバイ

P M・8：45、星野は緑山と事情聴取を行った。

真理絵警部：「それじゃあ、拓也君から話を聞こうかしらね。」

拓也：「俺から？」

真理絵警部：「駄目かしら？」

被害者は此処の食事に毒を盛られて亡くなったのよ？

それに、料理人は貴方だけでしょ？」

拓也：「そんなに言うんなら一番最初に受けてあげるけど・・・。」

真理絵警部：「本当！？

じゃあお願いするわ。」

星野は谷山のアリバイを聞いた。

谷山は、犯行のあったP M・7：30には調理場にいたと証言した。

また、被害者とは高校の時に2年程付き合っていたと言う。

因みに、被害者を恨んでいる人物がいるかどうか聞いた所、「解らない」と答えた。

次に深山 耕太の事情聴取。

深山は犯行のあった時刻には被害者と同じ机で食事をしていたと言う。

また、深山は被害者に恋を寄せていて本日は告白をしようと一緒に来たと言う。

因みに、裕一達が食堂に来る少し前に現場を離れたと言う。

そして、被害者を恨んでいる人物がいるかどうかは「知らない」と答えた。

三人目は緑山 拓海。

彼は、裕一が食堂に入ってから犯行のあった時刻には裕一達と同じ席に座っていた。

とてもじゃないが、被害者に毒を盛るチャンスは無かった。

それは裕一達も同じだ。

因みに、被害者の事を恨んでいる人物がいるかどうかは当然の事だが「解らない」と答えた。

何せ、被害者とは会った事も無かったのだから……。

同時刻（PM・8：45）、裕一は調理場の冷凍庫を調べていた。だが、気になる様な物は無かった。

裕一：「（やつぱり残ってる訳無いか……。）」

裕一は一体何を探しているのだろうか？

裕一は調理場を後にした。

PM・9：00、事情聴取が終わろうとしていた。

数葉：「ゆういちさまあ、何か見つかったんですう？」

そう言いながら市ノ瀬は後から裕一に抱きついてきた。

おっと、コイツの存在を忘れていた。

裕一は市ノ瀬に「何も見つからなかった」と言った。

裕一：「それより、苦しいから離れてくれないか？」

数葉は「あら、それはいけませんでしたねえ」と言っ裕一から離れた。

この時、裕一は「何故コイツが俺の彼女なのだろう？」と思った。

裕一は星野に事情聴取の結果を聞いた。

裕一：「となると、三人共怪しいですね……。」

と、そこへ永井 大似の一人の男性がやって来た。

星野は男性に向かって「滝山刑事、遅いじゃないの！」と怒鳴った。

滝山刑事：「滝山 啓二って、フルネームで呼ばないで下さいよ！」

何とも哀れな……星野はフルネームで呼んだつもりは無い……。

滝山刑事と言ったのだ……。

拓海：「ほお、滝山刑事の下の名前って啓二って言うんですね。

初めて知りましたよ。」

滝山刑事：「み、緑山さんまで……。

所で真理絵ちゃん、捜査の方は何処まで進んでいるだい？」

真理絵警部：「たった今事情聴取が終わった所よ。

って、その名前で呼ぶのはやめて下さいと言った筈でしょ!？」

滝山刑事：「じゃあ真理ちゃん。」

真理絵警部：「それも駄目！」

私はこれでも捜査一課の警部なんですよ。

他の呼び方があるでしょ!？」

滝山刑事：「何を偉そうに……。」

俺は君の先輩だぞ？

君より刑事歴の長い先輩様せんぱいさまに命令か？」

真理絵警部：「御免なさいね滝山先輩。

でも、人としては私の方が1年長い。

と言う訳だから人生の先輩として命令させて貰うわ。」

いや、人生歴は関係無いだろ……。

寧ろ仕事なんだから上司と部下の関係でしょうが……。

滝山刑事は「言ったなあ!」と叫んで星野の弱点である横腹くすぐを擦り始めた。

真理絵警部：「ぎゃー!」

啓二君、くすぐったいわよ!」

け、啓二君？

何、二人ってそう言う関係だったの!？」

って見れば解るか……。

そこで自称・私立探偵の緑山が「お二人とも仲が良いんですね」とからかった。

すると、二人は「誰がこんな奴!？」と怒鳴る様に言い返した。

拓海：「ハモったろ?」

と、緑山が言うともたもや二人同時に「ハモってない!」と怒鳴った。

明らかにハモってる!

これは否定出来兼ねる事実だ!

だが、二人はその事には全く気付いていなかった。

とまあ、そう言っ訳で時間だけが進んで行った・・・。

所持品

真理絵警部：「それじゃ、皆さんの所持品を見せて貰いましょうか。」

星野は容疑者三人の所持品を見せて貰うと言った。

最初に谷山の所持品から確認した。

谷山の所持品は以下の物だ。

財布、タバコ、ライター、愛用の料理包丁、コックの帽子、コックの白衣。

全部で六つあった。

次に深山の所持品。

財布、206号室のルームキー、推理小説、お風呂セットの四つ。随分と少ない物だ・・・。

そして、緑山の所持品。

財布、虫眼鏡（探偵の必需品？）、208号室のルームキー、シャールックホームズ風の帽子と服（ホームズオタクか？）、クーラーボックス、釣り道具の7点である。

最後は被害者の所持品。

財布、300万程入った封筒（何故こんな物が？）、スケッチブック（絵描きさんか？）、手紙、青酸カリの5つ。

真理絵警部：「何、この300万入った封筒は！？」

数えるの速ッ！

滝山刑事：「それも気になるけど、こっちの手紙も気になりますね。」

星野は滝山が掴んだ手紙を横取って中身を読んだ。

- - -
- - -
- - -

高木

美和子様

5年前、私の友人でもある桐山 景^{ひかり}を殺害した犯人が解りました。

犯人は美和子さん、貴方ですね。

私は警察にこの事を話しに行きますが、どうしても言うのでしたら口止め

料として300万を用意して頂きたい。

待ち合わせ場所はそちらで指定して下さい。

余計な事をしたら今度は私が貴方を殺します。

被害者

の友人

- - -
- - -
- - -

こ、これは脅迫状！？

真理絵警部：「深山さん、ご存知でしたか？」

耕太：「いや、彼女はそんな事は一言も・・・。」

真理絵警部：「そうですか・・・。」

滝山警部：「真理絵ちゃん、被害者の所持品にあるこれって青酸力
りだよ！？」

と、青酸力りを指差して言う。

真理絵警部：「だから、その呼び方はやめろっつーの。

で、青酸力りが被害者の所持品から出て来たのよね。

と言う事は、自殺かしら・・・。」

現段階では自殺で決まりだろう。

A M・0:30、時刻は既に12時を過ぎていた・・・。

滝山刑事：「真理絵ちゃん、今日はもう遅いから捜査の続きは明日にしよう?」

真理絵警部：「じゃあそうしましょう・・・。」

あれ、お決まりの文句が無い。

面倒になって諦めたのか?

と言う訳で、捜査の続きは明日の朝になってからやる事になり、今夜は解散と言う事になった。

裕一は布団に潜りながら事件の事を考えていた・・・。

裕一：「(高木さん、本当に自殺なのか?)」

高木さん、お願いだから俺に真相を教えてください!」

裕一はそう願った。

だが、死人は言葉を交わさない・・・。

それは当然の事だ・・・。

そして、裕一は深い眠りに付く・・・。

その頃、星野はと滝山は部屋取って布団に入って就寝していた・・・。

いや、良く見ると布団がうごめいている。

更に追求しよう。

二人は裸になり布団の中で抱き合っていたのだ!

成る程・・・やはり二人はこう言う関係だったのか。

脅迫状について

裕一は夢を見た・・・。

???：「苦しい・・・助けて・・・。」

誰だか解らないが女性の声が聞こえる。

美和子?：「助けて・・・。」

私は高木 美和子・・・。

真相は・・・5年前・・・。

私が・・・桐・・・が・・・握つ・・・わ。

お願い、あの・・・偵を・・・問いつめて!」

高木?はそう言い残して消えてしまった。

裕一：「待つて、もう少し話を!」

だが、その声はもう、届かず闇に吸い込まれて行った・・・。

翌朝、裕一は目を覚ました。

時刻はAM・9：00を回っていた・・・。

今朝は捜査の続きがある・・・。

それにしても、さっきの夢は何だったのだろうか?

裕一はさっきの夢を思い返す・・・。

美和子?：『助けて・・・。』

私は高木 美和子・・・。

真相は・・・5年前・・・。

私が・・・桐・・・が・・・握つ・・・わ。

お願い、あの・・・偵を・・・問いつめて!』

偵・・・いったい、誰の事なのだろう?

裕一は気になって仕方がなかった・・・。

裕一は起きあがり事件のあった現場へ行った……。

真理絵警部：「おはよう。」

遅かったわね？

もう捜査は結構進んでるわよ。」

裕一：「何処まで進んだんですか？」

星野は現在の捜査状況を話した。

裕一：「成る程、5年前に亡くなった桐山きりやま 景ひかりさんのご遺族に会わ

れた訳ですか。

それで、何か解ったんですか？」

星野は桐山家で得た情報を話した。

それは、緑山 拓海が亡くなった桐山 景と交際していたと言う事だった。

それを聞いた裕一はかなり驚いた。

裕一は緑山にこの事をぶつけてみた。

すると、案の定緑山は自白した。

拓海：「ああ、5年前まで景は俺の彼女だったさ。

だからって俺が今回の被害者を殺す訳が無い。

あんたは俺を疑っているのか？

それはとんでも無い勘違いだぜ。

取り調べの時も星野さんに話したけど、被害者の事は俺は知らないんだ。

もし疑うんなら谷山とか言う奴を疑ったらどうだ？

料理や水を運んでいるのは谷山だしさ……。」

・・・水！？

裕一は谷山に話を聞いた。

拓也：「確かに料理を作って運んでいるのは僕だけど毒なんか盛ってないよ？

第一、僕は彼女の事なんか恨んでないし……。
もし恨んでいるとしたら彼女の方だよ。」

裕一：「え？」

拓也：「別れ話を持ちかけたのは俺なんだ。それも急だったから・・・。」

だから、彼女は今でも俺の事恨んでるんじゃないか？」

谷山は詳しい事情を話した。

拓也：「あれは、2年前の今日の事だった。」

俺は親の都合でアメリカへ行く事になったんだ。

それが急だったからちゃんと話も出来ず俺は彼女にいきなり別れる様にお願ひしたんだ。

そして、アイツは嫌がって・・・。

でも、最終的には解ってくれたよ。

だから、俺にアイツを殺す理由なんて無いよ。畜生、いったい誰がアイツを殺したんだ!？」

裕一は礼を言つて調理場を後にした・・・。

裕一：「(いったい誰が、か・・・。)」

裕一は事件の事を思い返した・・・。

裕一：「(そう言えば、あの時にテーブルに乗ってた料理つて、トリカブトの根だったな・・・。)

ま、まさかな・・・。

けど、あのトリカブトは同じキンポウゲ科でも毒を持たないニリンソウだからな。

あれで殺せるとは思わんが・・・。)」

裕一は事件の事をまとめた。

事件のまとめ（前書き）

此処では今まで起きた事件の事をまとめたいと思います。

本編とは全く関係ありません。

次話の事件の真相を読む前に此処で推理して犯人を特定してみてください。

事件のまとめ

被害者は高木 美和子。

死因は青酸カリによる中毒死。

また、被害者の所持品から青酸カリが発見されたことから自殺の線が高いと見られる。

次に、これが殺人だったとしよう。

そうになると、動機があるのは5年前に付き合っていた桐山 景を殺された私立探偵の緑山 拓海。

しかし、緑山は被害者の事を知らないと言っている。

と言う事は自殺なのだろうか・・・。

だが、まだ自殺として片づける事は出来ない。

何故なら、あの手紙があるからだ。

手紙の内容はこうだった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

高木

美和子様

5年前、私の友人でもある桐山 景を殺害した犯人が解りました。

犯人は美和子さん、貴方ですね。

私は警察にこの事を話しますが、どうしても言うのでしたら口止め

料として300万を用意して頂きたい。

待ち合わせ場所はそちらで指定して下さい。

余計な事をしたら今度は私が貴方を殺します。

被害者

の友人

- - -
- - -
- - -

この内容によると、被害者の高木 美和子は殺された可能性が高くなる。

いや、そう考えるより被害者の高木がその手紙を送った人物を殺そうとしたが逆に殺されてしまった。

そう考えるのが妥当だろう・・・。

そして、事件当時に被害者の食べた料理に入っていたトリカブトの根。

確かに、トリカブトの根は猛毒で服用すると死に至る・・・。

だが、あれは同じキンポウゲ科でも毒を持たない「ニリンソウ」の方だ。

あれで人を殺せるとは思わないが・・・。

まさか、あの人はそれを知らないで！？

おっと、その前にまだスポットライトをあびていない人物が一人だけいたな。

もし、あの人物が犯人だとしたら・・・。

裕一：「（そうか、そうだったのか！

間違い無い、犯人はあの人だ！）」

裕一は皆に犯人が解ったと伝え現場に集めた。

事件のまとめ（後書き）

次話から犯人の名前が出ます。

まだ解って無い人はもう少し考えろ！

解らないけど答えが知りたい人や解った人は進んで下さい。

事件の真相（前書き）

此処から犯人の名前が出ます。
まだ推理してない方は読まない方が良いかもです。

事件の真相

拓海：「星野さん、犯人解つちやつたよ俺。」

真理絵警部：「嘘、本当に！？」

「じゃあ食堂に着いたら教えてね。」

二人はそう話ながら食堂に入って来た。

真理絵警部：「あれ、何この集会みたいな集まりは？」

滝山刑事：「実は、あの河野君と言う子が、犯人が解つたから皆を食堂に集めてくれた。」

「今、事件の真相を話してる所だよ。」

二人が目を配ると、裕一が事件の真相を話していた。

裕一：「そう、犯人は料理にトリカブトの根を使っ たんです。」

「そうですよね、犯人の谷山拓也さん？」

裕一は谷山を指名する。

耕太：「え、拓也が!？」

拓也：「くっ、いつたい何時いつから気付いてた？」

裕一は例の手紙を取りだした。

裕一：「気付いたのはこの手紙を読んでからですよ。」

裕一は例の手紙を読み上げた。

1	1	1
2	2	2
3	3	3
4	4	4
5	5	5
6	6	6
7	7	7
8	8	8
9	9	9
10	10	10
11	11	11
12	12	12
13	13	13
14	14	14
15	15	15
16	16	16
17	17	17
18	18	18
19	19	19
20	20	20
21	21	21
22	22	22
23	23	23
24	24	24
25	25	25
26	26	26
27	27	27
28	28	28
29	29	29
30	30	30
31	31	31
32	32	32
33	33	33
34	34	34
35	35	35
36	36	36
37	37	37
38	38	38
39	39	39
40	40	40
41	41	41
42	42	42
43	43	43
44	44	44
45	45	45
46	46	46
47	47	47
48	48	48
49	49	49
50	50	50
51	51	51
52	52	52
53	53	53
54	54	54
55	55	55
56	56	56
57	57	57
58	58	58
59	59	59
60	60	60
61	61	61
62	62	62
63	63	63
64	64	64
65	65	65
66	66	66
67	67	67
68	68	68
69	69	69
70	70	70
71	71	71
72	72	72
73	73	73
74	74	74
75	75	75
76	76	76
77	77	77
78	78	78
79	79	79
80	80	80
81	81	81
82	82	82
83	83	83
84	84	84
85	85	85
86	86	86
87	87	87
88	88	88
89	89	89
90	90	90
91	91	91
92	92	92
93	93	93
94	94	94
95	95	95
96	96	96
97	97	97
98	98	98
99	99	99
100	100	100

高木

美和子様

5年前、私の友人でもある桐山景を殺害した犯人が解りました。

犯人は美和子さん、貴方ですね。

私は警察にこの事を話しに行きますが、どうしても言うのでしたら口止め

料として300万を用意して頂きたい。
待ち合わせ場所はそちらで指定して下さい。
余計な事をしたら今度は私が貴方を殺します。

被害者

の友人

- - - - -
- - - - -
- - - - -

手紙を読み上げた裕一はこう言った。

裕一：「恐らく、動機は友人である桐山さんを殺害された事。

この手紙を被害者に送りつけたのは貴方ですね？」

谷山は頷いてこう言った。

拓也：「ああ、そうだ。

俺がアイツを殺したんだ。」

裕一：「でも、何で5年も経ってから？」

拓也：「あれは、色々調べてたんだ。

犯人に気付いたのは大学に入ってから4年経ってからだった。

俺は犯人について調べる為殆ど大学を休んだ。

それから4年経って犯人に気付いた時は啞然としたよ。

高校の時に付き合っていた美和子が景を殺した犯人だったんだからな。

だからこそ今になってその手紙を美和子に送りつけたんだ。

そうすれば美和子は必ず誘いに乗ると思って・・・。

そしたら、美和子が昨日になって突然来たんだ。

俺に殺されるとも知らずにね。

その為に俺は旅館の裏に生えてるトリカブトの根を彼女の食事に入れたんだ。」

谷山は何もかも自供した・・・。

しかし、裕一はこう言った。

裕一：「でも、そのトリカブトの根は毒を持っていない『ニリンソ

ウ』と言う山菜です。」

拓也：「う、嘘だろ!？」

俺はちゃんと調べたんだ。

あれがトリカブトでその根は猛毒だと言う事を！」

裕一：「似てるんですよ……」

花の生えていない時期のトリカブトとニリンソウはね。」

拓也：「そ、そんな馬鹿な!？」

それじゃあ、真犯人は誰なんだ!？」

そこへ割って入ったのは緑山だった。

拓海：「待てよ、犯人は谷山さんだ。」

真相は全て谷山さんが自供した通りだよ。」

裕一：「違います。」

真犯人はトリカブトの根では無く青酸カリを使ったのです。

言った筈だ、被害者の口元からアーモンド臭がするとね。」

拓海：「じゃあどうやって気が付かれずに毒を盛ったんだ?」

真理絵警部：「そうよ河野君、被害者に気が付かれず毒を盛るなんて

絶対に不可能だわ!」

果たしてそうだろうか……

裕一：「被害者に気が付かれずに毒を盛る方法が一つだけある……

氷……犯人は氷を使っただんです。」

拓海：「……」

真理絵警部：「で、でも……皆の証言を聞くからには被害者に近

づいた人間なんて……

それに事件のあった時刻、被害者には誰も近づいて無いわ。」

確かにそうだ……

だが……

裕一：「それがいたんですよ……

深山さんが一度トイレに立ってる間に一人だけ被害者に近付いた人物がね!」

すると、皆が驚く。

裕一：「犯人は予め用意した無色透明の液体青酸カリ入りの氷を被害者に近付いた時、マジシャンが良く使うミスディレクションと言うテクニクを使って水の入ったコップの中にこっそり入れたんです。」

そして、犯人はそこを離れ僕たちが食堂に入って来た時、僕たちに声を掛けて席に座った。

そうですね、真犯人の緑山 拓海さん！？」

一瞬にして皆が緑山の方を振り向く。

すると、緑山は反論をした。

拓海：「ま、待ってくださいよ。」

確かに、その方法なら俺でも出来る・・・。

だが、どうやって氷に毒を仕込んだんだ？

それに、どうやって持ち運んだんだ？」

裕一：「先ず、凹の形をした氷を作りその中に無色透明の液体青酸カリを入れ再度凍らす。」

そして、その氷をクーラーボックスに入れて持ち運ぶ・・・。

だが、クーラーボックスだけでは怪しまれてしまう・・・。

だから先ほど貴方の所持品にあった釣り道具と一緒に運んだんです。」

真理絵警部：「た、拓海君・・・。

貴方、犯人呼ばわりされてるのよ？

な、何か言い返しなさいよ！？」

だが、緑山の口から出た言葉は星野の想像も付かない事だった。

拓海：「ふっ、全て巧く行ったと思ったのにな・・・。

ああそうさ、高木 美和子を殺したのは俺だ。」

裕一はもう一度例の手紙を出して言った。

裕一：「動機はこの手紙ですね？」

拓海：「ああ、そうだ・・・。

俺は景と付き合っていたんだ。

だけど、5年前に景が突然この世を去って・・・。

あの時ほど犯人を憎んだ事は無かった・・・。

だから俺は私立探偵になって犯人の事を調べたんだ。
そしたら、犯人自らが連絡をくれたんだ。

『5年前に桐山 景と言う人を殺しました。
助けて下さい。』

警察には行きたくありません。

行けば今度は私が殺されてしまいます。』

これはチャンスだった。

俺は待ち合わせ場所を決めて此処で待ち合わせをしていたんだ・・・。

高木 美和子に青酸力リを持参させてね。』

成る程、だから被害者の所持品に入っていたのか・・・。

拓海：「中学生探偵君、後は君の推理通りだよ。

星野さん、俺を逮捕してくれ。

俺は星野さんに手錠をはめて貰いたい・・・。」

星野は、涙を流しながら緑山に手錠をはめた・・・。

裕一は星野を「花は全ての女性を輝かせる。貴方の様な美しい方が
泣かれたら折角の美貌が台無しになる・・・。」と言って慰めた・・・。

その時、星野は胸が「キュン」となったが気にせずに緑山を連れて
行った・・・。

中学生に「トキメキ」って奴か？

星野が緑山を連行した後、食堂はシーンと静まりかえっていた・・・。

辺りはもうすっかり暗くなっている。

裕一たちはもう一泊する事にした・・・。

夢が現実か、あの世とこの世の狭間！（前書き）

一応、この話がエピソードのつもりです・・・。

最後までご堪能して下さい。

因みに、非科学的な事なので意義のある方は読まないで下さい。

子供の夢を破壊します。

お婆ちゃんが言っていた。

子供は宝物・・・この世でもっとも罪深いものは、その宝物を傷つける者だ。

夢が現実か、あの世とこの世の狭間！

裕一は201の部屋にで布団に潜っていた・・・。

裕一は夢を見た・・・。

裕一：「こ、これは・・・。

さっきの夢？」

そう言うと、目の前に可愛くて麻木 久仁子にそっくりな一人の女性が現れた。

それも、先ほどとは違って鮮明にだ。

美和子：「私、高木 美和子よ。

さっきはちゃんと話す前に消えちゃって御免ね・・・。

でもあれは、5年前に私が殺した桐山 景がやった事なの・・・。

だから、その・・・気にしないでね。

それから、私を殺した犯人・・・。

暴いてくれありがとう。」

高木は礼を言った・・・。

いやいや、これは夢だ。

美和子：「ふふ、夢だと思ってるのね。

でもこれは夢じゃないわ。

私が貴方を肉体から一時的に魂を出してあの世とこの世の狭間に連れてきたの・・・。

要するに幽体離脱をしてるって事よ。

信じないのなら抓ってみたらどうかしら？」

裕一は無意識の内に頬を抓った・・・。

痛かった、かなり痛かった・・・。

裕一：「夢・・・じゃない・・・。

そうだ、5年前の事なんだけど・・・。

その、何で自首しなかったの？」

美和子：「自首はしたわ。

でも、あれは正当防衛だったのよ。」

正当防衛？

美和子は5年前の事を映像で見せた。

裕一：「こ、これは？」

美和子：「私の記憶・・・。」

裕一は美和子の記憶の中で橋を渡っていた・・・。

まるで自分の体験の様に・・・。

すると、裕一の目の前から一人の女性が走って来た・・・。

裕一：「彼女は？」

美和子：「彼女は桐山 景・・・。」

桐山は止まる気配も無く裕一に向かって来た・・・。

そして、ぶつかって二人は転倒した。

裕一：「い、痛え！」

な、何で感覚が!？」

美和子：「今、貴方は過去の私に憑依してるのよ。」

霊ってそんな事も出来るんだと妙に感心する裕一。

景：「ちよつと、あんた何処見て歩いてんのよ！」

裕一・美和子：「そ、そつちからぶつかって来たんだろ!？」

と、裕一と高木の声と一緒に出た。

裕一：「え、これってどうなってるの？」

美和子：「言っただでしょ、貴方は過去の私に憑依してるの。」

憑依してる訳だから、外で生きてる人と会話は当然出来るわ。」

景は高木に突っかって来た。

景：「何よその言い方!？」

貴方、礼儀の一つも知らない訳？

まず、人とぶつかったら謝る。

それが礼儀ってもんでしょ!？」

そう言っつて、高木に掴み掛かった。

掴み掛かった景は橋から美和子を落とそうとした。

裕一・美和子：「な、何すんのよ!？」

裕一は高木の声と共にそう言った。

突然出た女言葉だ。

景：「私はね、礼儀がなつてない奴が大嫌いなのに、特にあんたみたいな奴がね！」

あんたなんか、橋から突き落として殺してやる！」

二人は数分ほどやり合った。

裕一・美和子：「私には、まだまだ沢山やりたい事があるの。

あ、あんたなんか……」

殺されてたまるもんですか！」

裕一は最後の力を振り絞って景を押し返した。

そして、力を入れて一気に景を投げ飛ばした。

すると、景が橋から落ちて行った……。

景：「そ、そんな……」

景はみるみる内に落ちて行き、やがて川に沈んだ。

裕一は啞然とした。

裕一：「……」

こ、こ、こ、殺したのって……。

お、お、お、お、俺!？」

美和子：「そうとしか言えないわね。

だって、あのときの私の身体は貴方が支配権を握っていたんですもの。」

裕一：「あの時?」

美和子：「うん、あの時。

5年前、橋を歩いてたら突然と身体が言う事を聞かなくなったのよ。そう思った瞬間、私の身体は勝手に動き出したの……。

そしたら、目の前から桐山 景が走って来てぶつかって……。

次に出た言葉は私が言おうとした事じゃなかった。」

裕一：「俺が出した言葉……」

美和子：「そう、貴方の言葉……」

そんな話を話していると、場面がいきなり例の食堂に変わった・・・。

裕一：「こ、此处は？」

美和子：「私が殺された旅館の食堂よ。」

裕一：「ひえっ！」

じゃあ、俺は毒を飲んで死ぬ？」

美和子：「いいえ、死ぬのは私だけよ。」

私が死んだ瞬間、貴方は体外へ放出されて元の世界に戻る・・・。
けど、毒を飲んだ苦しさはそのまま伝わるわ。」

裕一：「うわ、ひでえ！」

美和子：「しょうがないわよ、私の身体に憑依してるんだから。」

高木は食堂の席に座っていた・・・。

一人の男が近付いて来た・・・。

その男は、犯人の緑山 拓海だった。

拓海：「貴方が高木 美和子さんですね？」

裕一・美和子：「ええ、そうですけど貴方は？」

拓海：「私立探偵の緑山です。」

例の脅迫状の事で声を掛けました。」

裕一・美和子：「じゃあ、早速話を聞いて下さいますか？」

緑山は「分かりました」と言いながら高木のコップに何かをした・・・。

だが、裕一はそれを見逃さなかった。

裕一・美和子：「てめえ、何青酸カリ入りの氷入れてんだよ!？」

と、突っ込んだ瞬間に「ハッ」と気付いて口を押さえた。

美和子：「ば、馬鹿っ、何やってるのよ!？」

裕一：「御免・・・。」

もしかして、今で歴史とか変わっちゃう？」

美和子：「変わっちゃうに決まってるでしょ!」

そう言うと、高木の霊魂は薄くな行って行った・・・。

裕一：「でも、そうすれば君は生き返るから良いんじゃない?」

美和子：「だ、駄目よそんな事したら。」

そんな事したら、貴方と私の魂が融合してしまうわ・・・。」

高木は突然訳の分からない事を言った。

裕一：「はぁ、何訳の分からない事を・・・。」

美和子：「私が貴方になるか貴方が私になるかのどちらの事が起きるって言うてるの！」

そんな事を話しながら緑山との会話は進んでいた。

拓海：「なぜ分かったんだ？」

と、怖い顔をして言った・・・。

裕一・美和子：「私には全てを見通す力があるのよ。」

と、高木に憑依してる裕一は誤魔化した。

拓海：「くっ・・・。」

緑山はそのまま去ってしまった・・・。

裕一は「何だアイツ・・・。」と心の中で思った・・・。

そして、コップの水を一口飲んだ・・・。

しかし、そのコップは緑山が先ほど青酸カリを入れた物で気付いた時には時既に遅し。

青酸カリが体内で科学反応を起こして青酸ガスを発生させた後だった・・・。

裕一・美和子：「（くっ、高木さんはこうやって死んだのか・・・。って事は、高木さんを殺したのは俺って事か！？）」

高木に憑依した裕一はそう思いながら喉を押さえてその場に倒れた。すると、裕一と高木の霊体は同時に肉体から放出された・・・。

美和子：「私、死んだのね・・・。」

霊体の高木はそう呟いた。

裕一：「ごめん、俺のせいだ・・・。」

裕一は高木に謝った・・・。

美和子：「き、君は・・・私の中に入ってた？」

裕一：「ああ・・・。」

美和子：「私が死んだの、貴方のせいじゃないわ。」

あの男が毒を入れたのがいけないのよ。

お願い、あの男を牢屋に入れて！」

それは無理なご相談ですね。

裕一：「それは、あそこで食事をしてるもう一人の俺に頼んでよ。」

裕一は過去の自分に指差して言った……。

すると、裕一は元の時代へ引つ張られるように戻された……。

裕一：「こ、此处は……。」

美和子：「元の世界よ。」

裕一：「と言う事は、此处は俺が眠ってる部屋？」

美和子：「そうよ……。」

ありがとうね、歴史変えないでくれて。」

裕一：「いや、あれは無意識の内にと言うか何と言うか……。」
と、誤魔化した……。

美和子：「そんな事よりそろそろ肉体に戻った方が良いわよ。」

早くしないと肉体と霊体を結んでいるシルバーコードって言う紐が切れちゃうわ。」

裕一：「え、でもどうやって戻れば？」

美和子：「肉体に重なれば戻れるわ。」

裕一は騙されたと思いながら肉体に重なった……。
すると、高木の言った通りに肉体に戻る事が出来た。

肉体に戻った裕一は直ぐ目を開けた。

裕一：「高木さん、戻れたよ。」

裕一は高木にそう言った。

美和子：「あ、貴方、私の姿が見えるの！？」

私は霊体なのよ、見える筈が……。」

裕一：「そう言えば、何でだろう？」

美和子：「きつと、幽体離脱をした時に能力が開花されたのね。」

この時からだった……。

裕一には誰にも見えない者が見える様になったのは……。
暫くすると、朝の光が差し込んで来た……。

裕一は起きあがった・・・。

すると、どこからともなく市ノ瀬が現れて裕一に抱きついて来た。

数葉：「ゆういつちくくん、おっはよ〜。」

裕一：「お、おう。」

数葉、朝早くから元気良いな。」

数葉：「だつてえ、今日は東京に帰る日でしょ？」

だから早起きしたんですう。

早く支度して帰るですう。」

裕一：「い、いっけねえ！

忘れてた〜！」

と、裕一をどこかで見てた高木が聞こえない様に「クスクスッ」と笑う。

こうして、裕一は帰り支度をして市ノ瀬を連れてとつと東京へ帰って行った・・・。

夢か現実か、あの世とこの世の狭間！（後書き）

5 殺目と6 殺目が気に入らなかったから自主的に削除した事を此処で通知致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6263a/>

河野裕一の事件簿！ 4殺目

2010年10月10日01時56分発行